

2008 年度 春学期レポート
(1月28日～5月12日)

第3期生 管野奈津美

1、はじめに

アメリカに来て2回目の学期ということもあってクラスの選択や履修の方法など戸惑うことなく準備することができた。冬休みの間に祖父を亡くし、ショックも大きかったのだが幸運なことに冬休みが長く、のんびり過ごせたので精神的に落ち着くことができた。前学期は英語に集中するため、3クラスだったのだが今学期は留学の目的であるデフアートに踏み込むため、4クラスに増やした。

2、クラスの様子

履修状況は以下の通りである。

Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
10:00-11:20 Introduction of De'VIA	9:30-10:50 Deaf culture	10:00-11:20 Introduction of De'VIA	9:30-10:50 Deaf culture	
Lunch Time				
2:00-3:20 Ceramic	1:00-4:00 English 103S	2:00-3:20 Ceramic	1:00-4:00 English 103S	
5:00-8:00			5:00-8:00	

(1) English 103S

English 103 は学部生にとって必修の英語のクラスとなっている。3時間という長いクラスだったが、語彙、文法、エッセイとバランス良く勉強できるクラスであった。文法は少し簡単で退屈だったが、語彙に関しては毎回小テストがあり、とても良い刺激になった。知らない単語があっても例文をみて大体どういう意味なのか予測できるテキストブックを使っており、わざわざ辞典で日本語の意味を調べる必要がなくとても勉強しやすかった。また、クラスの終わりの方に本を読んで議論する時間があり、テーマはイスラム教とイラン革命である。本といってもアメリカでベストセラーになったコミックであり、筆者が少女時代に味わったイラン革命・イラン&イラク戦争の経験がコミカルに描かれていて

読みやすかった。文章ごとにイラストがあるのでどういう展開がなされているのかわかりやすく、無理なく楽しめる本だった。学期後半はエッセイを書いて提出することが増えた。週に1回、エッセイを書いて提出するというスローペースで物足りなさを感じたが、語彙テストが多く、いい刺激になったのでよかったのではないかと納得している。

(2) Deaf Culture

前学期の Deaf Studies のクラスの内容をより発展させたクラスである。先生が黒人のためなのか、ろう学校における黒人差別の話やビデオが多く、前のクラスでは触れられなかったテーマなので新鮮だった。2月はまず Culture とは何かというテーマから入り、定義について徹底的に学んだ。3月は Culture から Deaf Culture に移行し、Audism について学んだ。日本ではあまり知られていない言葉だが、アメリカのろう者の間では有名な言葉である。性差別や人種主義のように、色々な差別や抑圧があり、Audism はろう者に対する聴者による差別や抑圧を指している。Gallaudet University ではずいぶん昔から Audism をなくそうと運動してきており、その一環としてホームページやビデオも作られており、驚いた。日本にはそういう概念がないのでさすがアメリカと感じた。クラスでそのアメリカのろう者が Audism の経験談を話すという形式のビデオを鑑賞し、ショックを受けたことが印象に残っている。最終プレゼンテーションのテーマは「Deaf Culture とは何か？」であった。私自身、ろう文化とは何かと深く考えたことがなかったので、どうプレゼンするかとても悩んだ。そこで、「Japanese Deaf Culture」というテーマで日本とアメリカを比較して Deaf Culture とは何かとプレゼンテーションをした。もちろん言語や手話も異なるが、強いて言えば、日本ではアメリカで言うサインネームの概念がなく、名前の漢字に従って作ったものが多いということと、アメリカと比べて指文字をそんなに使わないということを発表した。Deaf Culture についてもっと掘り下げて勉強できるかと思っただが、期待していたよりもそうでもなかったので残念である。

(3) Introduction of De'VIA (Deaf View Image Art)

アメリカのデフアーティストとして有名なポール・ジョンソン先生のクラスでデフアートについて学べる講義であり、私にとって今学期の中でとても有意義なクラスであった。先生いわく、Deaf Art について詳しく学べるのは世界でも

Gallaudet University だけで、「君たちはとてもラッキーだ」と言っていた。De'VIA (Deaf View Image Art) というのはアメリカでいう Deaf Art の名称のことでそれにおける定義としては、ろう者のアーティストがテーマ関係なく作ったからデフアートになるのではなく、ろう者としての経験や苦しみが表現されたものがデフアートと見なされるのである。Art とは何か、なぜ人はアートを求めるのかという議論から始まり、次はマイノリティとは何か、マイノリティとアートの関わりは何かというテーマで進められた。マイノリティのアートについて調べてプレゼンをする課題があり、黒人、アジア、ヒスパニック、女性、ゲイ、レズビアンなどのテーマが出て、私のグループのテーマは「レズビアン」であった。レズビアンのアーティストがいつ、どんなきっかけでレズビアンになったのか、どのように表現しているのか詳しく調べた。彼女達はレズビアンであることを誇りに思っており、同時に世間の偏見に苦しみ、レズビアンであることをカミングアウトするまでの苦悩、偏見などを自分の芸術作品を通して表現しており、そういうところでは、デフアートと通じる部分があると感じた。例として私のグループが選んだアーティストの一人 Tina Fiveash はオーストラリア出身の有名なカメラマンでレズビアンをテーマにした作品を撮り続けている。そういう社会的な抑圧にアートという手段で立ち向かっている彼女たちの生き方に心を打たれた。



Tina Fiveashの代表的な作品「From Stories for Girls」(2004)
(http://tinafiveash.com.au/stories_for_girls_twilight_lovers.html)

最終プレゼンテーションのテーマは「デフアーティストのタイムライン」であった。デフアーティストがどのように育って、どんな影響を受けてデフアート

を始めたのか詳しく調べてほしいということだった。とても重要なのは、どう
いうきっかけでアーティストがデフアートを始めたのかということである。そ
こで、日本でただ一人「Deaf」をテーマに活躍しているデフアーティスト乗富
秀人さんに焦点を当てることにした。彼にコンタクトを取ってみたところ、快
くインタビューを承諾して下さり、メールのやり取りをした。北海道在住の画
家で、元々は風景画を中心に制作しており、様々な賞をとるほどの実力派だ
ったが、数年前にろうの息子が生まれたのをきっかけに「Deaf」をテーマにした
作品を作り始めた。本人自身、口話教育で育ち、親とのコミュニケーションが
上手く苦しんだ経験を持っているため、同じろうである息子に同じ苦しみを味
わいさせたくないという思いからデフアートを始めたと語っている。本当にイ
ンタビューに丁寧に答えて下さったおかげで、プレゼンテーションは上手くい
った。プレゼンテーションはとても好評でクラスの先生が「遠い日本にも同じ
ような思想を持って活躍しているデフアーティストがいて感動した。」とおっ
しゃっていた。「君たちが日本に帰ったらアメリカのDe'VIAを伝えてほしい。
デフアーティストたちのグループを作って、日本なりのDe'VIAを展開させてほ
しい。」と激励のメッセージを頂いた。また、同時に様々な国のDeaf Artの作品
に触れることができ良い刺激になった。



乗富秀人さんの作品「お母さんの手話」(2005)



乗富秀人さんの作品「安らぎ」(2006)

(<http://www17.ocn.ne.jp/~deafart/index.html>)

(4) Ceramic (Basic Hand-Building Techniques)

前学期は中級クラスで今学期は上級クラスを履修しようかと思ったが、時間がどうしても合わず、初級クラスを履修することになった。初心者のためのクラスなので、どう作るか一から指導しなければならないが、道具や機械を効果的に取り入れ、幅広い作品を作って驚いた。そのクラスを通して、アメリカと日本では教える内容とプロセスが全く違うので、いい勉強になった。秋学期、春学期と続けてクラスをとってきたおかげか、道具や釉薬の名前もほぼ英語で理解できるようになり、制作を楽しめるようになった。アメリカの釉薬はとてもカラフルでどう色を組み合わせるのかとても楽しい。ただ、授業で忙しくなかなか作れなかったのが残念だが、勉強で行き詰まったときにとてもいい気分転換になった。大好きな陶芸のクラスの先生が、今学期で退官されたので、とても寂しい限りだ。本当にアメリカに着いた時からずっとお世話になっていて、バイトを紹介してくれた先生でどんな時でも「あなたにとっていい経験になるでしょうから」といつも助けて頂いた。とても寂しいが、この1年この先生の

もとで学んだことは一生忘れないだろう。



クラスで制作した作品その1



クラスで制作した作品その2

3、アパート生活

今学期、寮を出てアパートに引っ越したことでアパートの家賃の支払い、インターネットの開通などアメリカで生活するのに必要な手続きを初めて経験し、世界が広がったと感じている。寮と違ってアパートではすべて自分が責任を持たなくてはならず、3人のルームメイトとアパートの家賃や食費などをシェアしているのでルームシェア生活での役割分担やお金に関するルールを話し合い、ルームシェアの文化がない日本ではできない経験をさせてもらった。私は主に家賃の支払い担当で毎月ルームメイトから家賃を集めて自分の口座に振り込み、管理会社に支払っている。やはり他人と暮らすということは到底簡単でなく、お互い心地よく暮らせるようコミュニケーションが大切だと感じた。

4、Lab Assistant

週に6時間だけだが、今学期からLab Assistantという学内のバイトを始めた。Lab Assistantというのは主に生徒が誰か来たか確認したり、盗難がないか、機械を使う時に危険がないかどうか実習室を管理する仕事である。私は陶芸部屋のLab Assistantでほとんどの生徒が初心者なので生徒に作り方のアドバイスを求められることも多く、またアート学科の学生と交流することができ、とても良い経験になった。

6、春学期のまとめ

一番楽しみにしていたデフアートのクラスがやはり一番収穫が大きいクラスであった。今まで長い間、デフアートとは何だろう？という疑問があったのだが、今回のクラスで疑問が解け、今はとても爽快な気分である。前学期で目標にあげていた、デフアートに関しての調査は成果を得られたのではないかと思う。

7、来年度に向けて

アメリカに来てもうすぐ1年を向かえようとしており、たくさんの友人に恵まれ、順調な留学生活を送っている。秋学期には実際にデフアートの作品を制作できる授業があると聞いたので、デフアートの作品制作に挑戦していきたいと思っている。それと平行して世界中のデフアートについて調査できたらと思っている。